

令和元年5月31日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02799

研究課題名(和文)「価値観に働きかける研修」のあり方を問う基礎的研究

研究課題名(英文) Research on the practical execution of workshops affecting participants' sense of values

研究代表者

宇佐美 洋 (USAMI, Yo)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40293245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「知識や技能を与えること」ではなく、「自らの価値観を振り返り、再考すること」を目的とするワークショップ型の研修や授業を実施し、その研修参加者に対しインタビューを実施することで、具体的にどのようなプロセスにより価値観変容が起こるのか、こうした形式の研修に対し違和感や不快感が起こりうるとしたそれはどのような要因によるものなのか、上記の知見を踏まえた時、研修実施者としてはどのような配慮が必要になるのか、について考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多様な価値観が交錯する現代社会においては、自他の価値観の違いを知り、多様な価値観のあり方を尊重しつつ、必要に応じて自らの価値観を内省し問い直すことが求められる。このためにはワークショップ型の研修が効果的であるが、「自らの価値観を問い直したい」というニーズが自発的に生じることは少なく、またこうした研修に対し抵抗感を感じる人も多い。そのような事情の中、人をこの種の研修へと自然に近づけない、かつその中で無理のない形で変容を促していくための配慮について、インタビューデータの精密な分析を通じて論じたところに本研究の学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)： The authors carried out several kinds of workshops, purpose of which was to not only give knowledge and skills to the participants but also have them reflect and rethink on their inherent sense of values. After these workshops, some of the participants were interviewed. Based on the analysis of the interviews, the authors answered the following research questions: (1) through what kind of a process the participants' sense of values could be modified, (2) what factors could give the participants a feeling of discomfort, if any, in such workshops, and (3) based on the findings above, what kind of a special consideration would be needed to carry out such workshops.

研究分野：言語教育

キーワード：ワークショップ 態度変容 価値観の問い直し 他者への共感 二人称的アプローチ ネガティブ・ケイパビリティ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

多様な価値観が共存する現代社会においては、自分の価値観にのみ固執することなく、異なる価値観に対しても開かれた意識を持つとともに、自分自身の価値観についても絶えざる問い直しを行い、更新を行っていかうとする態度が極めて重要となる。

研究代表者は、上記のような態度を育成していくためには、参加者自らが他者ととともに能動的・相互的な行動を行い、そのプロセスにおいて自分が感じたことを内省するという「ワークショップ型」の研修が効果的と考えた。そこで代表者は、他の研究者との共同研究により、上記のような態度を育成するためのワークショップ手法をいくつか考案するとともに、それを研修や授業の場で実施し、参加者の反応の観察や事後インタビューなどに基づき、ワークショップ手法の洗練化を行ってきた。その成果は書籍『評価を持って街に出よう 「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』(宇佐美洋【編】2015, くろしお出版)として出版されている。

しかしながらこの種のワークショップは、非常に広い範囲の人々に対してアピールするものでは決してなかったように思われる。一部の人々からはかなり高い評価を得ている反面、従来型の「技能習得型研修」「新知識提供型研修」と比較すると、この種のワークショップに自ら進んで参加しようとする人々は、日本語教育関係者の間でも必ずしも多いとは言えなかった。

そこで代表者は、こうした「価値観作用型ワークショップ」に、できるだけ多くの人々を招き入れ、自然かつ無理のない形で自らの価値観を問い直すことを促すためにはどうするのがよいか、その方策を考える必要を感じるにいたった。

2. 研究の目的

上記のような背景に基づき、本研究の目的として以下の課題を設定した：

「価値観作用型ワークショップ」を実施することにより、参加者の中にどのような価値観の問い直し・変容が、どのようなきっかけによって起こりうるかを示すとともに、「価値観作用型ワークショップ」を実施する意義を明らかにする。

こうしたワークショップに対し、違和感や抵抗感が起こりうるとしたらそれはどういう要因によるものなのか、またそうした違和感や抵抗感はどのようにして軽減され得るのかについて考察を行う。

上記の知見を踏まえ、この種のワークショップを実施する際、実施者としてはどのような点に配慮すべきであるかを示す。

3. 研究の方法

以下の基本的手順に沿って研究は遂行された：

- (ア) 日本語教育関係者を対象とする「価値観作用型ワークショップ」を、大学の授業、日本語教師に対する研修の場などで実際に実施する。
- (イ) 事前アンケートに対する記述内容や、授業・研修への参加状況の観察から、ワークショップ研修に違和感・抵抗感を何らかの抵抗感を持っていたり、あるいはワークショップ参加の中で強いストレスを感じていたりすると思われる参加者をインタビュー対象者(協力者)として選定する(複数)。
- (ウ) その対象者に対し、ワークショップの中で感じていたことについてインタビューを行う(必要に応じて、過去の同種のワークショップへの参加経験や、「なぜ自分はそのように感じていたのか」についての自己分析についても話を聞く)。
- (エ) 同じワークショップに参加していた複数の協力者の発言内容を比較し、統合的に分析することで、「2. 研究の目的」に示した3つの研究課題に対する回答を探る。

4. 研究成果

今回の研究において主たる分析の対象としたのは以下2つの授業・研修の場であった。

(A) 大学院での授業

日本語教師育成を主目的とする大学院プログラムの一環としての授業。参加者は大学院生19名(うち10名が留学生)。授業担当者は研究代表者であった。授業の教育目標は、「『評価』に関係する様々な活動に、学生自身が主体的に参加することにより、評価の背後にある価値観が個人により極めて多様であることを実感するとともに、そうした多様性も踏まえた上で自分の評価価値観を問い直し、再確立することを目指す」ことであった。

(B) 演劇ワークショップ

「フォーラム・シアター」という手法を用いて展開された演劇ワークショップ。参加者は、日本語教育関係者23名(大学・日本語学校の日本語教員、研究機関職員、地域人材育成コーディネータ、日本語教育を専攻する大学院生(留学生含む))。フォーラム・シアターとは、日常生活の中で起こる問題を取り上げた劇を即興的に演じ、かつ観客も演者と入れ替わってその劇

を演じ直してみることによって、異なる立場に立ってその問題をとらえ直すことを目指すワークショップ手法である。事前にこのワークショップの趣旨を伝え、関心を持った人のみが自由意志により参加してもらえるようにした。

いずれの場からも、参加者の中からそれぞれ3名を選び出し、複数回のインタビューを実施した((A)については授業とは直接関わりのない研究分担者の1人がインタビューを担当した)。

それぞれの場の分析から明らかになったことは以下の通りである。

(A)

協力者へのインタビューからは、(1)【知識を効率的・計画的に獲得したいという学習観】、(2)【グループメンバー間の「相性」の問題】という概念が共通して見られ、これがこうした形式の授業への不満となっているようであった。特に(1)のような学習観を持っていた参加者は、授業全体を通じて不満足感が強く、それは様々な授業の中で経験を経ても変化しにくかったようである。

一方、(3)【話し合いに参加することについてのハンディキャップ感】という概念を示していた参加者(留学生)もいた。この参加者は自分が「母語話者でない」「日本語教育経験を持たない」という点で、他の参加者と比較しての「ハンディキャップ感」をもち、これが消極的な授業参加態度とつながっていた。

しかしこの参加者は活動の中で、「ノンネイティブの事情がネイティブに理解されていない」と感じる経験を持つ。これにより、「ノンネイティブの事情をどうしてもネイティブにもわかってもらいたい」「それを説明できるのは自分だけだ」という強い使命感を持ち、最終的には「ハンディキャップ感」を乗り越えることができていた。

ここからこの種の「参加型授業」に対する抵抗感を軽減する方策として、以下のことを提言した：

- 【知識を効率的・計画的に獲得したいという学習観】が一定数存在することを前提とし、時には知識伝達も行うような授業設計にする、あるいは教員がファシリテーターとしてではなく、一人の参加者として自分の見解を述べる機会ももつ、というような工夫を行う。
- 「参加型学習とは試行錯誤の場なので、メンバー間の相性によりたまたまある活動がうまくいかなかったとしても気にせず、次の活動に期待すればよい」という「ポジティブな気分」を授業内で醸成しておく。そのために授業実施者は、活動の中で各グループの成果の優劣比較をすることなく、すべての成果にそれなりの意義がある、というメッセージを発し続ける。
- 当初この種の活動への参加について「ハンディキャップ感」をもっていた参加者も、活動内である印象的なできごとを経験することによって、その「ハンディキャップ感」を克服することは十分可能であることが示された。しかしそうした出来事を意図的に起こすことはできず、授業実施者としては場の設定だけを行い、あとは待つしかない。しかし、「起きた変容をより確実なものとするような働きかけ」は可能である。そのためには参加者の様子を詳細に観察し、変容が起きかけたときにはそれを適切に認め、encourage することが重要である。

(B)

インタビューを分析したところ、この種の演劇ワークショップ(フォーラム・シアター)を対し、一部の参加者は「具体的な問題解決方法を得たい」という期待を持ってしまっていたことが明らかになった。フォーラム・シアターとは「立場を変えて演劇を実践することで、様々な可能性を検討する」ことを本来の趣旨とするものであり、安直な正解を探すためのものではない。フォーラム・シアターは「不確実さや不思議さ、懐疑の中にいることができる能力」、すなわち「ネガティブ・ケイパビリティ」を涵養し得るものであるはずだが、ともするとその逆の、「安直な問題解決を求める」態度を助長する可能性もあることが指摘された。

一方で、フォーラム・シアターにこれまで複数回参加したことのある協力者からは、「過去2回フォーラム・シアターに参加したときには、心のどこかで『問題解決を求める気持ち』もなかったわけではなかった。しかし、フォーラム・シアターへの3回目の参加となった今回初めて、解決策が出なくても『それはそういうものだ』という納得感』を得ることができた」という語りを得られた。ここから、深い意味での「ネガティブ・ケイパビリティ」を獲得するにはそれなりの年月がかかり、継続的な働きかけが必要であることが示唆された。

フォーラム・シアターの参加者の中には、ある役割を演じた自分の意図が観客になかなかわかってもらうことができず、そのことに大きなストレスを感じていた人もいた。しかしその参加者は、ワークショップが終了した時、その参加者の様子を見ていた他の参加者から「今日は大変でしたね」という共感的な声掛けを受けることにより、「他者に理解してもらえないつらい気持ち」から脱することができたのだという。この声掛けは、レディ(2015)のいう「二人称的アプローチ」(対象と自分を切り離さないで個人的関係にあるものとして、情感をもってかか

わり、対象の情感を感じ取りつつ、対象の訴え・呼びかけに「答える」ことに専念すること)として機能しており、それがこの協力者に感謝を与えたものと考えられる。

その参加者に対しては、ワークショップの2か月後、さらにその5か月後に振り返りのインタビューを行い、フォーラム・シアターの中で、またその後の本人の教育実践の中で何を感じていたかを聞き、受け止める試みを行った。すると、1回目のインタビューの際には自己の価値観と、それに基づく行為の正当性を説明しようとする態度が見られたが、2回目のインタビューの際には「学生を取り巻く事情」にも配慮し、「学生には常に厳しく接すべき」という自らの価値観を問い直すような態度も観察できた。

本人は、そのように自らの考えの深化が起こった理由のひとつとして、「インタビューを受けたこと」そのものを挙げていた。このインタビューにおいては、協力者の行動や価値観に対する一切の評価や論評をせず、共感を持って理解することが目指されていた。つまりこのインタビューもまた、この協力者に対する「二人称的アプローチ」として機能し、それがこの協力者の価値観の問い直しにつながったという可能性が指摘できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

宇佐美洋, 規範を評価の対象としてとらえる 「価値観の問い直し」を支える哲学的考察, 査読無し, 言語・情報・テキスト, 24, 2018, 63-78

宇佐美洋・柳田直美, 「参加型授業」に対する抵抗感はどこから来るのか: 学習観の多様性に向き合うための事例研究, 査読無し, カナダ日本語教育振興会 2017 年度大会プロシーディングズ, 2017, 252-271

http://www.cajle.info/wp-content/uploads/2017/09/32CAJLE2017Proceedings_UsamiY_YanagidaN.pdf

宇佐美洋, 「評価価値観」はいかに定義され、いかに構造化されうるか 非母語話者の謝罪文を評価する場合, 査読無し, 日本語文化研究会論集, 12, 2016, 1-18

http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/ronshu/2016/1yo_usami.pdf

〔学会発表〕(計7件)

中村香苗, 宇佐美洋, 嶋津百代, 参加者にとって「よい話し合い」とは?: 話し合いにおける「参加感」と「参加行為」の関係, 第43回社会言語科学会研究大会(筑波大学), 2019

宇佐美洋・文野峯子・森本郁代・岡本能里子・柳田直美, 「演じること」への参加はどのような学びをもたらすか: 「フォーラム・シアター」参加者の語りから, 言語文化教育研究学会 第5回年次大会(早稲田大学), 2019

横田和子・岡本能里子・佐藤仁美・當銘美菜, 情動レベルに働きかける市民性教育の実践に向けて—ことば・からだ・アートを融合させた難民問題へのアプローチ, 言語文化教育研究学会 第5回年次大会(早稲田大学), 2019

宇佐美洋, 協働のプロセスの中から発見する自分: 大学における, 「自ら考える力」を育成する授業実践から, 東洋大学経営学部FD研修会(招待講演), 2019

浜田麻里, 金田智子, 宇佐美洋, 齋藤ひろみ, 日本語教師の成長を促す「方法」について考える - 3つのアプローチから -, ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会(国際学会)(カ・フォスカリ大学), 2018

足立祐子・松岡洋子・安場淳・西口光一・宇佐美洋, 「生活者としての外国人」への言語教育に携わる人材とはどうあるべきか—その人物像・育成方法について再考する, 日本語教育学会 2018 年度春季大会(東京外国語大学), 2018

宇佐美洋・柳田直美, 「参加型授業」に対する抵抗感はどこから来るのか: 学習観の多様性に向き合うための事例研究, カナダ日本語教育振興会 2017 年年度大会(カルガリー大学)(国際学会), 2017

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：文野峯子
ローマ字氏名：BUNNO, Mineko
所属研究機関名：人間環境大学
部局名：人間環境学部
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：10310608

研究分担者氏名：岡本能里子
ローマ字氏名：OKAMOTO, Noriko
所属研究機関名：東京国際大学
部局名：国際関係学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：20275811

研究分担者氏名：森本郁代
ローマ字氏名：MORIMOTO, Ikuyo
所属研究機関名：関西学院大学
部局名：法学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：40434881

研究分担者氏名：柳田直美
ローマ字氏名：YANGIDA, Naomi
所属研究機関名：一橋大学
部局名：国際教育センター
職名：准教授
研究者番号（8桁）：60635291

(2)研究協力者

研究協力者氏名：金田智子
ローマ字氏名：KANEDA, Tomoko

研究協力者氏名：近藤彩
ローマ字氏名：KONDO, Aya

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。